以上が本書の内容についてきわめて簡単な紹介であるが，最後に，評者が感じた点をつけくわえさせてもらうと，第1には，農産物価格論がソヴェト農業論のなかでしめる位置や，本書の叙述の中心をなす諸論争が提起されてきたソヴェト農業の現実の具体的動向についてもっと詳しく触れられていたら(著者は農産物価格の制度的側面についてのみ触れている)，本書はもっと広範な読者にとって理解しやすいものになっていたろう。著者が本書の刊行を契機に，ソヴェト農業論の他のいくつかの重要な問題領域に研究を進め，実りゆたかな成果を収められることを期待したい。

【大崎　平八郎】

山口和雄編

『日本産業金融史研究——製糸金融編』

東京大学出版会　昭和41年10月 viii, 685, xi ページ

経済史の専門家でもない私が本書の書評をお引き受けしたのは僭越である。ただ本書はきわめてユニークかつ卓抜な書物と思われたので，あえて筆をとったことをおことわりしておく。本書は序章(総論部分)につぎ，売込問屋の金融(第1章)，長野，山梨両県の器械製糸業への金融(第2,3章)，座繰中心の福島，群馬両県の，製糸金融(第4,5章)を扱っている。執筆者は山口和雄氏のほか，中村政則，石井寛治，高村直助，杉山和雄氏である。

はじめに私が本書のメリットと考える点を率直に述べてみよう。わが国の銀行の歴史は明治初年にはじまり，明治10年代はじめには多くの国立銀行が設立され，ついで私立銀行も増加して，会社組織をもつ最大の産業であった。また製糸業は，前田正名をして「たった1つの糸柱」といわしめた輸出貿易の大宗であって，紡績とならんで明治時代における最大の産業であった。しかも，この両産業は，中央の勧奨によって起ったものではあったが，同時に1にぎりの「政商」のものではなく，全国到るところに，さまざまの性格をもつ企業者によって創立され，相当の発展を示したのであった。そこに明治期における自生的な資本主義化の典型がみいだれる。その点はこれまで正当な評価をうけていたとはいえない。戦後ようやく各地方の国立銀行や個別銀行，製糸，織物等の企業のモノグラフが公表されるようになったけれども，その歴史的位置づけはまだ充分とはいえないように思われる。全体としての経済史と，産業，企業，企業家個人についてのモノグラフを架橋し，その位置づけをこころみようとした点にまず本書の第1の特色がみいだされる。

さらに本書の中心テーマは，製糸業でも銀行業でもなく，製糸金融であった。当時の製糸業の生産機構と，それを金融する銀行あるいは生糸問屋の実態が，克明に記録される。製糸業と金融業という2つの主要な産業の機能とその間をむすぶ物や資金の流れが生き生きと描き出されるところに，本書の最大の特色があるといってよい。

そのために，この書評も製糸金融のメカニズムに焦点をしぼりたいと思う。明治大正を通じて「製糸金融機関として重要なのは生糸売込問屋と銀行であった。売込問屋の生糸荷主に対する金融は，すでに明治初年からみられたが，当時は荷為替金の立替などが主で」あったが，明治20年以後売込問屋間に荷主の争奪が行なわれるようになって，製糸家への購繭資金の前貸が行なわれるようになり，製糸家は約束手形を振出し，あわせて向う1年間その製造糸の販売をすべて該問屋に委託し，売上金の中から借入金と利子を支払うことを約束した。売込問屋は貸付資金を横浜の取引銀行から借入れ借入利率と貸付利率の利ざやをかせいだのである。横浜の諸銀行は，問屋への貸付資金を日本銀行の再割引などの方法で借りた。

また長野県などでは製糸家(はじめは地方の生糸商)が第十九銀行などのような地方銀行から直接借入れる場合が多かった。荷為替金融のほかに銀行は直接器械製糸家に融資したのである。福島県など座繰製糸の場合は商人が荷預証券を担保として地方銀行で資金の融通をうけ，さらに集荷にあたった。ところが融通にあたる地方銀行も，多くはオーバーローンの状況にあったから日銀，あるいは三井・三菱など都市大銀行で融通をうけたのである。明治40年ごろには購繭貸出は2500～3000円に達し，その1/4が売込問屋の分，残りは地方銀行の分であったが，しかし問屋金融が銀行にくらべて重要でなかったとはいえない。問屋は市場の状況や製糸家の事情にくわしいので，銀行の貸出は問屋に追随することが多かったからである。また問屋金融はときには貸出期間を延長したり前貸金を貸出したりして製糸家の経営を援助するなど，地方銀行の場合よりも「いっそう基底的」であった。しかし，その一面で製糸業は金融によって不均等な発展を余儀なくされた。金融機関との結びつきの強い企業の方が発達がはやいという事実のほか，選別融資によって弱い企業が淘汰され，あるいは貸出の基準が釜数であったために，たえず釜数を増加しなければならなかったので，借金経営をつづけ，不況期には破綻するものも多かった(以上，p. 27—34)。この簡単な要約からも，製糸業

をめぐる資金の流れが簡明に知られるであろう。以上の事実は丹念な実証によってうらうちされている。

その代表的な実例として長野県における2,3の例をみよう。第1に第十九銀行の分析。ここでは，明治初年以来の考課状をはじめ，銀行に保存される根本資料を基礎にした分析が行なわれている。それによって，たとえば明治20年代には同銀行の主たる業務が生糸荷為替であったこと，当時の預金の1/2—1/3が政府預金であり，しかもオーバーローンがつづき，「日本銀行ヲ始メ各有力ナル銀行ノ後援」をうけていたこと，29年に普通銀行に転換してからもこの傾向は依然つづき，日銀以外にも正金など有力銀行への依存度は高かったが，とくに諏訪に支店を設けてのち同地方大器械製糸場への金融が急増し，その貸付方法はおもに荷為替前貸だったこと，40年代に入ると諏訪地区における最大の製糸金融業者となり，一流製糸家には大売込問屋引受の為替手形で貸付け，これを中央の大銀行で再割引するという方法をとっていたこと，日銀のほか中央の大銀行(この場合は三菱)との結合が強まったことなど地方産業銀行の関係がまざまざとえがき出されている(第2章第1節)。しかしその一方で第十九銀行は放慢な貸付を行なったのではなく，きびしい査定と選別を行なったことが示されている。

第2に，製糸家の結社の機能の分析。結社は，共同出荷，地方商人の排除，共同購繭，労働力対策の単位であったが，「個別経営の信用力不足を結社の信用におきかえることによって，横浜売込商との資金的つながりを容易にした」(p. 171)という重要な指摘がある。結社と売込商をむすびつけるのは大商人か大土地所有者であった結社リーダーの信用であった。明治20年代に入ると，結社は前貸金融によって特定の売込問屋と強く結合する。そのさい，「有名品」を産出する結社への問屋金融は強力であり，取引関係は安定していて，負債が増加しても絆が絶たれなかったのに反し，弱小製糸家は金融的結合が弱く，不況期には没落のうき目をみた (p. 185)。

第3に，長野県の武井家，山一林組，笠原家の3つの個別経営例があげられる。私には第1次大戦にともなう笠原家の経営分析が印象的であった。生糸の価格は国際市場の景況にしたがってはげしく変動するが，企業の収益を決定するものは，そのほかに繭価格，利子，賃銀，および生産力の5つである(p. 335)。そして，大正5年までは生糸価格および繭価格のうごきと1梱当り損益のうごきは「ほぼパラレル」だが，6年以降その傾向は乱れはじめる。それ以後賃銀コストと利子のコストが急上昇したためである。とくに利子の上昇は，大正7年ごろには資金調達網が加速的に広がり，春繭購入資金が増したため(p. 344)である。ところが大正9年恐慌にあたり，前年からの持越借入金への利子が増加したこと，利子率の高騰，借入期間の長期化などがあいまって，赤字への転換が生ずる。「外部資金への高度の依存を図ることなしに経営の拡大をなしえない製糸資本の蓄積様式」が破綻をまねいたのである(p. 348)。

以上3例はいずれも典型的な器械製糸の発展をみた長野県の例であった。ところが明治20年代の山梨県では第十国立銀行，あるいは若尾銀行でさえ製糸金融に積極的ではなかった。そのためもあってか，「無資力」な製糸家は，中小問屋の前貸に依存し「相対的に不利な条件」に甘んじるか，中小銀行(または類似会社)か地主＝高利貸に依存しなければならなかった。明治30年代以降若尾銀行をはじめ群部諸銀行の製糸金融が活発化し，器械製糸業は展開を示したが，同時にその資金はやはり中央への依存度が高いものであった。この金融面の立ちおくれは，山梨県の製糸業の長野県に対する立ちおくれの1原因となったとみられる(第3章)。

第4章は福島県の銀行と生糸商人への金融を扱う。第5章では群馬県に横浜の売込問屋との連繋の強い銀行が進出し，売込問屋を通じて現地の問屋に金融したのが初期の形態であり，やがて現地の問屋である江原家が第三十九国立銀行や上毛物産会社(のちに群馬銀行)に関係し，横浜の第2銀行と提携して製糸金融を行なった事実や碓氷社中心の組合金融(結局は問屋金融)がえがかれる。

編者もみずからのべておられるように，本書の圧巻は原資料を駆使した長野県の分析にある。しかしながら，その他の諸県の場合についても，これまで知られなかったメカニズムが，実態にそくして生き生きと提示される。この書物をよみ終って，あらためて考えさせられるのは現実の複雑性ということである。多様な現実を，多様なまま提示する努力は，それなしに何ごとも語られないという意味において，まさに歴史のアルファであり，同時にオメガでもある。しかもその個々の事実が全体との関係において明確に位置づけられようとしている点で，本書はユニークである。ただ，私は思う。こうした実証がつみ重ねられたあとで，もう一度全体像をつくる努力が必要なはずだが，それは従来のさまざまなこころみにくらべて，データがゆたかであるだけにかえって困難になるのではないだろうか．そのためのモノグラフの累積と，全体像へのあせることなき接近とを，本書の著者たちに期待したい。

【中 村 隆 英】